

鳴海周平の

全国ぶらり旅

熱海編



NHK大河ドラマで
現在放映中の「義経」でも度々登場する
ロケ地の熱海市。
源頼朝が旗揚げをした鎌倉幕府発祥の地として、
古くから特色ある文化圏を形作っています。
海と山に囲まれた素晴らしい景観と、
豊富な温泉の街、熱海を訪れました。





「ようこそ熱海へいらつしゃいました。今日はゆつくり熱海の魅力をご案内しますよ。」

そう言って迎えてくれたのは熱海市役所に勤務されている井出章彦さんと奥様の雅子さん、そしてご夫妻の友人で、熱海の船井本社に勤務されている佐々木愛さんの3人でした。

「熱海は見所がたくさんあるんですよ。ちょうど梅の時期ですし、まずは梅園に行ってみましょうか。」

日本で最も早く梅が咲くといわれている熱海梅園は、もともとは国内初の温泉療養施設である「喻汽（きゆうき）館」の遊歩公園だったそうですが、当時の内務省の衛生局長だった長与専齋が「病気は葉だけではなく、緑の中で適度の運動をして、身も心も治療してこそ効果がある」という信念で、横浜の豪商などの協力を仰いで造成したことが、現在の梅園のきっかけになったそうです。

「今では1万坪の園内に、樹齢100年を超える梅の古木などが750本以上もあります。1月にはミス梅の女王コンテストが開かれるんですよ。また、ここでは日本の早咲きの梅と、どこよりも遅い紅葉が同時に楽しむことが出来る年もあります。一年中花が楽しめますよ。」

さすが熱海。まさに「常春（とこはる）」という言葉がふさわしい街です。

「ところで熱海という言葉の由来なんですけど、これはもともとの地が富士山火山帯に属していて、火山活動によって形成されたからなんです。今から1千数百年前にこの火山活動によって凄い勢いで温泉が沸きあがり、海水が熱湯になってしまっただったと言います。」

「なるほど。温泉で海が熱くなってしまうから、熱海、なんですか。確かに今でも温泉が多いですよね。」





「はい、今でもかなりの温泉があります。これから案内するのは日本三大古泉のひとつに数えられるほど古い歴史がある、走湯(そうとう)神社と走り湯(はしりゆ)温泉という所です。ここは平安時代の歌謡にも東国第一の霊場と歌われているんです。」

「はい、今でもかなりの温泉があります。これから案内するのは日本三大古泉のひとつに数えられるほど古い歴史がある、走湯(そうとう)神社と走り湯(はしりゆ)温泉という所です。ここは平安時代の歌謡にも東国第一の霊場と歌われているんです。」

入ってみると奥の方から音を立てて温泉が湧き出ていました。

「江戸時代には、この入り口に案内のおばあさんがいて、湯治客にこの温泉に身体を打たせるといいよと薦めていたそうなんです。試してみたお客さんが『確かにいいね。これならここに住む人は皆病気をしないでしょう』と言うとおばあさんは『いやいやそうでもないよ。私も



この温泉は今から約二二〇〇年前に発見されたとされている全国でもめずらしい横穴式温泉です。山腹から湧き出た湯が海岸へと飛びように走り流れ落ちるさまから「走り湯」と名づけられました。また、「伊豆」の国名が走り湯の「湯出」に由来するとも伝えられています。

湧き出す湯が病を治し長寿に効験があるとされ、古くから神格化し信仰の対象としておりました。この山の手位置する「伊豆山神社」は江戸時代まで「走湯山・走湯権現」とよばれ、源頼朝が信奉し、源氏再興の基を作ったとして歴代鎌倉将軍の信仰をあつめました。

鎌倉時代以後は、二所詣(走湯権現・箱根権現)の参詣、後に三島大社も加えられる)が普及して、武家や東国に下向する公家等が参詣に訪れました。室町時代には文人・高僧や各階層の旅行者が湯治を兼ねて訪れ、江戸時代に入ると熱海に湯治に来た諸大名が参詣の折に必ず走り湯の見物をして帰ったと言われ、「大湯」とともに熱海の名を広く世に知らしめました。

鎌倉三代将軍源実朝は二所詣の折に走り湯にて次の三首の歌を詠んだといいます。

「わたつ海のかなかにむかひていつるゆの
いつのお山とむへもいひけり
「はしりゆの神とはむへそいひけらし
はやきしるしのあれはなりけり
「伊豆の国ややまのみなみにいつるゆの
はやきは神のしるしなりけん」

年中あちこち痛くて：』と答えたと言うんです。お客さん達は『せっかく治った気がしたのにおばあさんそりゃないよ』と笑いあったという話が伝えられています。何だかどかな光景ですよ。」

佐々木さんからそんなのどかな話を聴きながらも、とても霊験あらたかな雰囲気を感じられる温泉でした。

「走り湯」の上から長い長い石段がありました。この石段は権現坂と呼ばれ、伊豆山神社へと続いているとの事。「ちょっと長い階段、たなあ」と思いましたが、4人で話をしながら



▶中を覗くとあつという間にメガネが真っ白になってしまいました

▶
伊豆山神社の腰かけ石に仲
良く座る井出さんご夫妻
まるで源頼朝と北条政子の
よう？



▲ひとまわりすると寿命が1年延びるといわれている樹齢2000年の大楠
佐々木愛さんはいつもまわっているとか？

ら歩いて行くと、あっという間に伊豆山神社の本殿に到着しました。「ここは鎌倉幕府を開いた源頼朝と北条政子が忍び会って結ばれた場所でもあるんです。実は私たち夫婦もここが初デートの場所なんですよ。」
そう言っつて井出さんは、少し照れたようにお話をしてくれました。「ここは縁結びの神様としても有名なところで、その腰掛け石には源頼朝と北条政子が座っていたと言われているんです。僕達もよく座りましたけど(笑)。」

お2人を見ていて「縁結びの神様」というのが、とてもよく納得出来ました。

次に向かった先は「来宮(きのみや)神社」。ここには樹齢2000年と伝えられる天然記念物の大楠があります。高さ約20メートル、根本の周囲も20メートルという大きさは、只々圧巻です。

「この大楠は昔から不老長生、無病息災の象徴と言われています。周囲をひと廻りすると寿命が1年延びるとか、願い事が叶うとか言われ

ているんですよ。実は私たち夫婦は、伊豆山神社での初デートの後、ここで結婚式を挙げたんです。」
そう言っつてニコニコと笑うご夫婦に、またまた驚かされてしまいました。縁結びの神様と、無病息災、願い事を叶えてくれる神様。地元の神様のあらたかな霊験がひしひしと感じられました。

「最後に熱海の特産でもある「干物」の老舗にご案内します。釜鶴さんというお店で、地元では知らない人

がいないくらいの有名店です。ここ
の干物はホントに美味しいですよ。」
早速4人で熱海市の銀座町にある「釜鶴」さんにお伺いしました。「いらつしゃいませ。遠いところよく来てくれました。せっかくですから干物を作っているところをご覧になりますか?」

そう言っつて暖かく出迎えてくれたのは「釜鶴」の4代目、二見康一さんです。

康一さんから数えて5代前の先祖平七さんという方は、熱海で網元をしていたそうですが、江戸時代の末

期(安政の大地震による不況の時代)まぐる網権利の事で網元と漁民の間で争いが起こった時に、重税に苦しむ漁民の為に網元であるにもかかわらず、時の代官へ直訴に及び、捕らえられ八丈へ遠島の途中に大島で亡くなったそうです。そうした平七さんの志を継いだ三男の鶴吉さんが干物の販売を始めて、現在の「釜鶴」を創業したとの事でした。「釜鶴、つて面白い名前でしょう。これは昔、先祖の平七が持っていたイワシを煮る釜が浜風を受けてポーツという音を立てたのを聴いて、これは縁起がいいということであつたらしいです。その平七の三男である鶴



吉が始めた店だから「釜鶴」というわけですね。私どもの考え方の根底には、先祖平七の無私の心があります。手間がかかっても旬の物だけを、太陽の力をいただいて天日干しにしています。季節によって湿度も気温も違うわけですから、その時期に捕れる厳選した素材だけを使うという事が私たちのこだわりなんです。今は息子の一輝瑠(ひかる)と一緒に干物づくりをしています。親子5代に渡って地道にコツコツとやってきたことが、地元の皆さんに喜んでいただける理由でしょうか。」



そう言ってお店に並ぶ旬の干物を教えてくれました。春はあじや金目鯛、夏は鮎やトビウオ、秋はえぼだい、かます、冬は甘鯛、イカ、柳かれい、といった素材が並ぶそうです。たくさんのお客様の賑やかな笑い声と、小春日和の柔らかな日差しの中、釜鶴さんの干物がいつそう光って見えました。

「熱海はいかがでしたか？私は熱海市役所に勤めて今年で12年目になります。年々この街が好きになっていきます。もともとは長野生まれなんです。今では故郷のように安らいだ気持ちでいられます。この街は気候と同様に、本当に温かい人が多いですよ。」



▲社長の二見康一さんに、こだわりの製造工程を案内していただきました

海という街の魅力が改めて感じられてきました。温暖で年中花が咲き誇る熱海の人達とのぶらり旅は、心まで温かくなる素敵な出会いの旅となりました。



今回のぶらり旅では、熱海市役所の井出章彦さんご夫妻、船井本社佐々木愛さんに多大なるご協力をいただきました。誌面を借りて、心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。

釜鶴ひもの店

TEL 0557・81・2172